

港町に伝わる太鼓芸「金浦神楽」

金浦地区の伝統芸能

港町金浦に伝わる金浦神楽。江戸時代末期、当時黒川村（現黒川地区）の齋藤佐弥吉が博労（家畜商）として山形県庄内地方に渡っていたときに覚えた山伏音楽系統の神楽太鼓を、村の青年たちを集めて教えたのが始まりといわれています。これは、黒川神楽とよばれるもので、昭和15年ごろ黒川地区出身の佐々木松松によって金浦元町地区へ伝えられ、現在は金浦神楽となっています。

戦後、金浦元町地区の青年たちがまちを盛り上げて復興を図ろうと、活気あるこの太鼓の演技を習得し、豊作や豊漁満足を祈願して金浦神社に奉納しました。当初は青年たちで打っていた神楽でしたが、今では小中学生たちも参加し「ぼくち（紅白色のバチ）」を振って賑わいを見せるようになっていきます。

太鼓を背にして打つ動作は大変珍しいとされる金浦神楽。コロナ禍前は2月の掛魚祭りははじめ5月の金浦神社例大祭の祭礼などで奉納披露されていましたが、ここ数年は披露する機会が減っています。そんななか、受け継がれてきた灯を灯し続けているのが金浦神楽保存会です。

守り続けたい地域の芸能

今から35年前、当時の金浦神楽保存会で指導部長を務めていた方から誘われて当会に入会した現会長の北岡勉さん。耳から離れないアツプテンポな太鼓のリズムと笛の音色、そして誰をも魅了してしまう太鼓を背にし、手首を回しながら背面打ちをする姿が子どもたちからの憧れだったといえます。

金浦神楽保存会は、例年市内で行われる行事で公演しているほか、平成14年3月に白瀬南極探検隊90周年記念文化の国際交流金浦神楽ウエリントン・シドニー派遣事業へ参加、令和元年9月には第39回全国豊かな海づくり秋田大会で天皇陛下御臨席直前のオープニングセレモニーの中で金浦神楽を披露しました。また、以前金浦中学校のALTを務めていたニュージーランド人のマシュー・ブライソンさんが当会に入会し演技と笛を習得。マシューさんは帰国後「カグタイ」という和太鼓団体を結成し金浦神楽を母国で広め、平成30年に彼がカグタイムンバー4人を引率し「海を渡った金浦神楽」と題して当会とジョイントコンサートを行いました。ほかにも長野県の歌舞伎劇団「田楽座」に金浦神楽を伝授し交流を深めています。



大好きな地元の芸能を残したい

金浦のお祭りといえば金浦神楽。小さいときからずっと私たちの身近にあったものです。大好きな地元でこの伝統芸能を守り続けるために、これからもずっと金浦神楽に関わっていきたいです。



9月2日に行われた鳥海山伝承芸能祭で披露された金浦神楽



金浦神楽保存会

昭和43年4月、後継者育成を目的に金浦神楽保存会が設立されました。当時からその活動は活発で、日々の稽古のみならず町内でのイベントにも積極的に出演するなど活動の幅を広げていきました。現在は知名度も上がり、他市町村でのイベントにも数多く出演しているほか、地域の青少年育成の一環として後継者育成を図りながら保存会員一丸となり、地域の活性化に取り組んでいます。

市指定無形民俗文化財

金浦神楽保存会設立以前から伝統ある無形民俗文化財に相当するとされてきた金浦神楽。当保存会の活動が評価されたほか、住民の関心も高かったこともあり、昭和53年3月16日、金浦町の無形民俗文化財に指定されました。

演目は、通り神楽、奉納神楽、宵通り神楽、早替奉納神楽の4演目で、中でも打ちながら演者が入れ替わる早替奉納神楽は観客を魅了する演目となっています。

年に新型コロナウイルス感染症が拡大し、イベントでの公演がなくなりました。当時は稽古もできなくなりましたが、小学生の会員募集をするにも金浦神楽を見せる場がないため、金浦小学校に会員募集のチラシを配布するなど苦労したそうです。

「歳をとる毎に伝承芸能である金浦神楽を途絶えさせてはいけないという想いが強くなっています。しかし子どもは会員は年々減少し、現在は小中学生で10人。できれば保存会の卒業生が大人になった時にまた入会し指導してくれるのが理想ですが、そもも言っていただけません。神楽は、字の如く神様を楽しませるものです。自分たちが楽しまなければ神様も楽しんでくれないですね。神楽に興味のある方、笛を習ってみたいと思う方、未経験者も大歓迎です。私たちと一緒に金浦神楽を楽しみましょう」とぼくちを握り太鼓を見つめて微笑む北岡さん。

当保存会では、HPを開設しているほか、YouTubeでさまざまな動画も投稿しています。興味のある方、ぜひ気軽に連絡ください。



金浦神楽保存会HP



金浦神楽保存会 YouTubeチャンネル

問 金浦神楽保存会事務局
E tatakae.kagura@yahoo.co.jp